

随泉寺寺報

2003 年 8 月号 第 3 9 6 号

082-892-0217

浄土真宗本願寺派 高峯山随泉寺

お盆会法座

講師 住職 自修

講題 「お盆を迎えて」

はちす葉の にごりにしまぬ 心もて

何かは露を 珠とあざむく

僧正 遍照

今年もお盆がやってまいりました。今年も 41 名の方がお浄土にお還りになりました。

48 歳から 100 歳の方々まで、それぞれがそれぞれに、力いっぱい生き抜かれた人生であったと思います。縁のある方々にとっては、寂しい、悲しいお盆を迎えられることでしょうか。遇うが別れの始という言葉もあることは、知ってはいたのですが、現実の事となると、思い切れない悲しいことでしょうか。

お盆には亡くなられた方が還ってくるといわれています。月参りに行って、「お盆にはお父さん還ってきますか？」と聞かれた事があります。夢でもいいからもう一度会いたいという気持ちはわかります。

蓮は泥田の中にあんなきれいな華を咲かせます。悲しみいっぱいの中に真実なるものに出会えるということでしょうか。お盆に又会えるといいですね。



8 月の法座予定

8 月 2 日午後 6 時半より……………本部役員会

8 月 1 6 日朝席午前 10 時より……………お盆会法座

8 月 1 6 日昼席午後 1 時半より……………初盆追悼法要



今年の梅雨は・・・

ことしの梅雨は例年より長くて、九州の水俣地方では集中豪雨で、沢山の人が亡くなりました。今回の被害に遇われた方の多くは、浄土真宗の御門徒の方です。突然のことで、さぞ深い悲しみに沈んでおられることと思います。

10 年前の 7 月 2 8 日は、随泉寺が集中豪雨で離れの上の山が崩れ、被害にあった日です。あれからもう 10 年が過ぎました。昨日のこのように思い出します。

あの時もう 2 ~ 3 分早く土砂崩れが起っていたなら、あれが夜寝ている時だったら、家族に悲しい事が起っていたでしょう。今思い出してもぞっとします。住まわしていただいた家が、なくなってしまったのは悲しいけれど、たくさんの人の暖かい気持ちに触れる事ができて、よかったですと思います。お寺が大変だといってすぐに駆けつけてくださった方、普段は足が痛かったり、腰が悪いといった方が長靴を履いて、スコップを持って土嚢を作ったり、土砂を運び出してくださいました。苦しい事が起きたり、悲しいことに見舞われたとき、それを支えてくれた人々のありがたさが身にしみます。仏様はその悲しみ我が悲しみとそばにいて支えてくださいます。それを同痛・同悲といひます。

第 3 回随泉寺ビアガーデン

今年も 7 月 19 日の夕方 5 時から、第 3 回随泉寺ビアガーデンを開催しました。今年梅雨が長くて天気が心配でしたが、当日はねらった様に雨が降りませんでした。

今年は住職の都合で夕方 5 時からだったので、まだ暑さが残っていましたが、その分、ビールが飲みました。何しろ、20 リットルの樽を 2 本と 5 リットルの樽を開けてしまいました。しかし何はともあれ、男の方がたくさん来てくださるというのは、嬉しいことです。ビアガーデンは日頃お寺にあまりご縁のない方々に、すこしでも近づいてもらおうという企画ですから。来年もこそぞって参加してください。

初盆追悼法要

8 月 16 日午後 1 時半より去年(平成 14 年)の 8 月から平成 15 年 7 月 31 日までに亡くなられた方々の初盆追悼法要をお勤めいたします。ご縁のある方はご恩を偲びお参りください。

御礼

永代経懇志	壹拾萬円	中本	総江殿	故	中本	清三様	特別永代経志として
	壹拾萬円	隠野	静江殿	故	隠野	一夫様	特別永代経志として
	壹拾萬円	隠野	静江殿	故	藤森	シゲノ様	特別永代経志として
	壹拾萬円	隠野	静江殿	故	藤森	静一様	特別永代経志として
	壹拾萬円	宮原	順子殿	故	宮原	浄志様	特別永代経志として
特別懇志	貳拾萬円	畝本	利彦殿	故	畝本	勝様	特別懇志

世界に一つだけの花

作詞 横原 敬之

作曲 横原 敬之

唄 SMAP

NO.1 にならなくてもいい もともと特別な Only one
花屋の店先に並んだ いろんな花を見ていた
ひとそれぞれ好みはあるけど どれもみんなきれいだね
この中で誰が一番だなんて 争う事もしないで
バケツの中誇らしげに しゃんと胸を張っている
それなのに僕ら人間は どうしてこうも比べたがる？
一人一人違うのに その中で一番になりたがる？
そうさ 僕らは 世界に一つだけの花
一人一人違う種を持つ その花を咲かせることだけに 一生懸命になればいい
困ったように笑いながら ずっと迷ってる人がある
頑張ってる花はどれも きれいだから仕方ないね
やっと店から出てきた その人が抱えていた
色とりどりの花束とうれしそうな横顔
名前も知らなかったけれど あの日に僕に笑顔をくれた
誰も気づかないような場所で 咲いてた花のように
そうさ 僕らも 世界に一つだけの花一人一人違う種を持つ
その花を咲かせることだけに 一生懸命になればいい
小さい花や大きな花 一つとして同じものはないから
NO.1 にならなくてもいい もともと特別な Only one



ひとは作業所の寺尾先生の話をお聞きました。
知的障害を持った仲間のお話です。人並みということ
で話があったとき、いつも他の人と比べて優劣を競い、
勝ち負けを争い、みんな同じだったら安心する。
作業所の仲間の一人がポツリと
「わしは わしなみで えかろうがい」といわれたそう
です。なんと素晴らしい言葉でしょう。その話を聞きながら、スマップのこの歌を
思い出していました。
それぞれがそれぞれでみんないい。みんなちがってみんないい。

母を偲ぶ

平成15年の幕開けは、12日に姉が亡くなり、母が追うようなくなるまでの2週間、娘を思う母のやりきれない悲しい胸の痛み、親子の深い絆を身をもって示してくれました。それだけに続けての別れは、今までにない心身共に強いダメージを受けました。

特に変わったこともなく普段通りの生活のなか、母とのあっけない別れとなり思い出の詰まった我が家での暮らしは辛いものです。母は小さな体で六人(二男四女)の子供をもうけ、若い頃には苦勞の多い日々だったと親戚より聞かされておりました。しかし母は愚痴を言うこともなく、私たちを育ててくれました。どちらかというとな性的な性格で、事を選ぶに当たって、皆の意見等聞く耳を持たない欠点もありましたが、今何をすべきか一本筋の通った言動は、最後迄生かされておりました。反面八十五歳とはいえ、女性としての嗜みだと毎日お化粧を欠かさず、お洒落心もあり、かわいいおばあちゃんとして、孫、曾孫の人気もあり、膝の上はいつも誰かが座っていた程です。その上、ポケ防止だと云って、筆を走らせ、気づいたことを書き留める努力もしておりました。子供たち、孫、曾孫へと綴られた文は、ほのぼのとした内容が多く、各家族の安全と幸福をいつも願っていてくれていたのがよく分かりました。

母と優しい主人との三人、楽しく暮らした日々感謝しながら、母が私たちに教えてくれたことを、今後子供、孫へと引き継ぐことが、恩返しであろうと思っております。

お母ちゃん、いろいろ、種を蒔いてくれて本当に有難うございました。三十七年前に亡くなったお父ちゃんに、お姉ちゃんと一緒に皆のこと話してあげてくださいね。後になりましたが、生前お世話になりました、皆々様、随分寺様、心より御礼申し上げます。

平成15年3月

鈴木 善恵

